コメント

「力の指導」から「心の構えの指導」へ

文教大学　准教授
新　井　立　夫

最初に教育人間科学部長　高木まさき教授の挨拶の中で小学五年生が自殺したというのがあった。大津の問題でも大阪府の桜宮高校の体罰の問題でもそうだが、皆が触れていないのは「自ら死んではいけない」ということ。「いかなる理由があっても自ら命を絶つという選択をしてはならない、それは悪なんだ」ということに触れる人が誰もいないということが、新聞記事を読んでいても非常に寂しく感じるところである。今回いじめを考えるということで、もう一度その原点を見つめ直す必要があると感じた。

おそらく大久保部長とご一緒に仕事をするのは、今回で4回目になる。まず大久保部長がお話をされて、次に私が「現場でどう活かすのか」という展開をすることが多いのだが、今日はそのお話の中にあったコミュニケーションのことについて、まず述べたいと思う。今の子ども達、若者達はコミュニケーションが取りにくい時代に育ってきてしまったのではないだろうか。我々の時代は宅電であったので必ずしも本人が出る訳ではなかった。母親が出るかもしれないし、父親が出るかもしれない。その中で我々は宅電をかけながら、父親が出ようものならわざと好青年を演じるようにして、何とか彼女につないでもらおうということを、日常生活の中でやっていたのである。今の若者達、子ども達は、親が携帯に出ることはまず有り得ないので、いきなり「おーい、何やってる?」とか、相手の都合を考えないでメールを送ることもできる。そういったコミュニケーションの取り方が昔とは全く変わってきてしまっている。

次にルールについての話で言えば、単に「ルールを守りなさい」と押しつけるのは駄目だろう。良いか悪いかでは「悪い」と分かった上でのルールなのだから。とにかくやってはいけないことはやっていけない、でもそれを改善するために0から10へとすぐに達成できるようなそんな特効薬がある世界なのだろうか、というのが私自身の考え方である。個々に尺度というものを設けて考えたときに「3しかできなかったものが4になった、5になった」と、そういう形で捉えることはできないだろうか。

また何をしていいか悪いかという優先順位の付け方について言うと、例えばお弁当を食べる時に、今日はあなたが一番大切だと思うものから食べてごらんなさいと、一言先生が子ども達に言う。そこで子どもは一瞬でも考える。それを365日やり続けることによって多少なり順番付けを、たかが弁当であっても普段の生活の中で培っていくことができる。活字で教える部分ももちろん必要だが、そういった体験とか経験とかで教えていく部分も必要ではないだろうか。

滝先生が言われたことの中で、なぜいじめるのかということがあったが、これは人間の資質であり、備えついている本能であろう。それをいかにしてうまく折り合いをつけて「お互い様」という受け入れ方を出来るか。指導者はそういう精神を、スポーツとか特別活動、団体行動等を通じて教えていく必要があるのではないかと聞いていて感じた。

最後に今日の全体のテーマに関わることであるが、いじめの問題も物の見方・考え方は一つではない。その視点が無く、「駄目なことだから」「ルールだから」とシャワーのように浴びせかけても、良いか悪いかは既に分かっているのである。だから「互恵性」のところに軸を置いて、何のために学ばなければいけないのか、何のためにお互い助け合っているのか考えさせなければいけない。経験を持って自ら手本になるというHands-onの精神を大人達が持って、子ども達に接していけば、世の中が変わっていく。いじめの問題もかなり圧縮されて、ごみ箱にポンと入れられるようになるのではないだろうか。

（文責　教育学研究科1年　長島裕太）

【補遺】

何かを得たい場合や何かに立ち向かう場合、必ず「構え」が必要とされる。例えば、「いじめない構え」「いじめられない構え」そして、「学ぶ構え」「働く構え」「生きる構え」などのそれぞれの「構え」が児童生徒の心と身体に合ってこそ、活きた生徒指導、意味のある学校教育が展開できるのだ。その「構え」とは何だろうか。人が何かを得たい場合や物事に立ち向かうときには、心と身体がセットになった「積極的受動態勢」（積極的に受け入れようとする心と身体の姿勢・態度）＝「構え」が必要になるということである。

古来、日本民族は、農耕社会で生き抜いてきた。この農耕社会での感覚こそが、生徒指導をするうえで重要なファクター（要素）になる。いいかえれば、学校教育の指導の在り方そのものが、農耕社会の原点に返らなくてはならないのである。

アメリカやヨーロッパのゲルマン人は、生来、狩猟民族である。動物などの獲物を探して、見つけたら即、捕まえて食料にしていく狩猟民族である。捕らえた獲物は、その集団の首長、実権をもっている力のある者から優先に食べていく、力のある者が食して、残ったものを下のものが順番に食べていく。そんな仕組みだったと思う。

これに対して、農耕民族はどうであろうか。種を蒔こうが、苗を植えようが、直ぐに収穫できるものはない。先ずその前に、畑や田んぼを開拓し、耕し、土にいぶきを入れる作業がある。さらに、水を引いてこなくてはならない。それぞれ、大変な労力を要する作業が必要である。やっとの思いで、種を蒔いたり、苗を植えることが出来る。また、その後も大変な作業が待っている。雑草を取ったり虫を防いだり、晴れの日も雨の日も関係なく、農作業は続き、作物が収穫できるまで続く。この作業こそ、作物の成長を助けるものである。地道に来る日も来る日も同じような作業が続く。それでも、ともすれば、嵐が来て全部なぎ倒していくかも知れない。日照りが続き、水を与えることが出来ず枯らしてしまうかも知れない。農作業は、時として必ず上手くいくものではないのだ。それを分かっていながら、コツコツと地道な努力を重ねていくのである。「美味しい作物になってくれよ」「大きく実ってくれよ」などの望ましい成長を願いながら作業をしているのである。

学校教育の在り方として置き換えてみればわかりやすい。教師にしても、保護者にしても、合格という獲物に対しての狩猟民族になっていないか。進学に例えるならば、勉強もせずに合格する者が偉いのだろうか。農耕に例えてみれば、指導の在り方が見えてくるのではないだろうか。「力による指導」だけでは、作物や児童生徒は育たない。適度な手助けと作物が自ら生長できるような環境作りが、指導者に必要なことである。作物の生長を促し、その心に迫る指導こそ、必要なことだといえる。「力による指導」ではなく、「心による心の指導」でなくてはならないのである。「まじめに、地道に」作物がいくつもの季節を経て実るように、指導する側が地道に、ゆっくりとした生徒の成長を待つことを覚えなくてはいけない。

すべての児童生徒を対象として、社会的スキルや個性・自尊感情の伸長を図り、問題行動に至らぬよう育てることに力点を置いた、開発的生徒指導では、この「構え」が必要不可欠といえる。また、知性を高める体験学習を通じて、体験から学ぶ反省的思考の態度を育成することも大切である。実際に体験していくことに対し、反省を積み重ねることで、将来、目標を実現できる能力が育っていくことになる。

したがって、様々な失敗や成功体験について省みることにより、目標は、その行動によって実現されていくといえる。つまり、何かを吸収するときの基本は、生徒指導上においても、たとえ、反発心があっても、他者のいうことに耳を傾け、自分のこととして受け止め、我慢して聴くという成長への「心の構え」が要求されてくるのである。

（文責　新井立夫）